☆解放講堂奪還！
☆神田カルチエ死守！
☆全国学園バリケードストで闘おう！
☆70年闘争勝利！

進撃

1月21日
号外

東大闘争全学共闘会議
事務局編集委員会発行

18
19

本郷・神田闘争の革命的前進を全国へ！

明確化した東大闘争の本質
国家権力との全面対決

三千五時間、機動隊の手段を選ばぬ弾圧を撃退し、バリケードを守り抜いてきた解放講堂は、十九日午後五時五十分、ついに機動隊の泥グツにじゅうりんされ、中に在って英雄的に闘い抜いてきた五百人の同志たちは、全員、不当逮捕された。しかし、十八日、十九日の両日にわたって八千五百の機動隊の攻撃を、そして、権力の闘争圧殺策動を完全に粉砕しつくしてきた未曾有の闘いは①東大闘争が帝国主義権力との燃烈な全面対決の闘いであることを満天下に明らかにして②全ての抑圧された人間たちに闘う勇気を与える上でかえがたい物であったのだ。その証拠にこの闘いは両日にわたって、神田・本郷地区で、圧倒的な学生、労働者を結集して闘われた、都市ゲリラ闘争に発展的に止揚され、今や、個別学園闘争としての東大闘争は、圧殺策動に狂奔する権力の思惑とはウラハラに、全国的、全人民的反権力闘争へと深化、拡大をつづけているのだ。

解放講堂三五時間機動隊の弾圧を撃退

それは、もっとも献身的で、もっとも英雄的な闘いだった。われわれは、今再び、決して失うことのない見事な橋頭堡を、一九六九年一月十九日午後五時五十分、解放講堂において共有したのである。

同志たち、最もすぐれた前衛であった同志たちは最後に言った。

『われわれの闘いは勝利だった。全国の学生、市民、労働者のみなさん、われわれの闘いは決して終わったのではなく、われわれにかわって闘う同志の隊列が再び解放講堂から時計台放送を行なう日まで、この放送を中止します』―そして同志たちは澄みきった声で高らかにインターナショナルを合唱し、機動隊の暴力にひるまず、最後まで闘う決意のシュプレヒコールをしたあとで、うずくまるように肩をだき合って、逮捕されたのだった。

十八日朝七時、国家権力―大学当局は八千五百人の機動隊を出動させ、東大闘争の暴力的圧殺をはかったが、東大全共闘に結集する闘う学友の先進的・英雄的闘いによって圧倒的に粉砕され、十八日午後五時半ついに撤去を余儀なくされた。この日、ヘリコプター三機を使い、空中からもガス筒射撃を集中し、前代未聞の狂気の弾圧を行なった。列品館、法研を拠点とする学友は午後三時すぎまで極めて戦闘的に闘い、数度にわたり機動隊を撃破して解放講堂のバリケードに権力を近よらせない状況をつくり出した。

八時二十分頃、急を聞いてかけつけた学友三百人が、機動隊の壁を突破して正門内に突入、ノーヘルメットで解放講堂前まで戦闘的デモを敢行した。本郷地区一帯は緊日戒厳令下におかれたが、構内の闘う学友と連帯して機動隊の壁におしかけた学友の数は三千人で正午近くには森川町交番に徹底的攻撃を加え、これを粉砕した。

同じ頃、神田地区においては、中大、明大、日大を中心とする部隊二千人が神田地区をカルチェラタンと化し、直ちに出動してきた機動隊に大打撃を与えた。

激発する全国学園闘争の高まりに恐怖した政府ブルジョアジーはその総力をあげて、彼等の全面的闘争圧殺の突破口として東大全共闘に集中攻撃をかけてきたが、今や本郷・神田の闘う学友の熱い連帯によって全面的反撃を受けているのだ。

十八日の闘いは権力に更なる大打撃を与え、ついに東大構内立入禁止時間を十九日午前十時であったのを二四時間延長させるところまで追いこんだのである。加藤―佐藤の秩序回復（＝闘争圧殺）＝入試強行の政治路線に大損害を与えたのだ。このことは同時に、反体制運動を荷う、労働者、農民学生のすべてにとっての画期的進撃の第一歩なのだ。

全国学園バリケードストから70年大闘争への進撃を

われわれは不敗である

警視庁機動隊の全力投入の弾圧に抗し、時計台解放講堂を中心とする確固たる撤退戦は、全国の学友労働者の前に、国家権力の力の限界と、実力闘争の大きな意義を鮮明に打ち出し、全ての圧迫される民衆に、無力感からの脱出と、巨大な武装闘争への決起を、力強く呼びかけている。この世界に、暴虐と残忍と悲惨の存在するかぎり、全共闘の運動は、弾圧に屈するどころか、逆にそれに反して、ますます巨大に燃え拡がる他はないのだ。神田・本郷一帯にくりひろげられた都市ゲリラは、この事を高らかに宣言している。

十九日も未明より権力側は狂気の弾圧を解放講堂に集中した。前日、全共闘に撃破され、面目丸つぶれとなった機動隊は終夜で放水攻撃を続け、未明からは前日の倍を超すガス銃を発射して弾圧を再開した。しかし、解放構内の最も先進的な学友達は不退転の決意を固め、ついに後六時まで実に三十五時間、全共闘圧殺を狙う権力の暴力装置―機動隊に痛打を与えこれを撃破し粉砕したのだ。

更に十九日の闘いは加藤―佐藤によりかえしのつかない後退を余儀なくさせ、「構内立入禁止」を再度二十三日午前九時まで延長させたのだ。

学友諸君！

全国学園闘争はわれわれ全共闘の闘いを中心環として新しい局面を切り拓いたのだ。今や、加藤―佐藤はますます無方針に追いこまれ、われわれの闘いは逆に強大な政治闘争へと大飛躍をとげようとしているのだ。「東大入試中止」は闘争圧殺のマヌーバーに過ぎなかったことを想起せよ。本郷・神田の闘争の前進を見よ。

十八日、十九日の闘争における先進的・英雄的闘いを想起せよ!!

意味は、ますます帝国主義の忠実な従僕になりつつある東大の姿勢に抗し、あらゆる権力の弾圧を許さない不動の権力を学内に創出する事にある。それは従って大学当局、マスコミが宣伝する学内問題という矮小なものとは最初から異なっており、明確に日本帝国主義への巨大な挑戦としてあったのである。

この点において、東大闘争に相前後して突入した日大・教大闘争をはじめ全国大学闘争は、全く貴を同じくし、まぎれもなく一体となって七〇年安保大闘争の前哨戦を形作っていると言える。企業・組合の二重支配の中で、暗黒の抑圧にくみこまれている労働者本隊の蜂起が直ちには困難な情況の中で学生の反乱は、その燃火線であり先兵となって激しく闘い抜かれている事を見なければならない。

政府・総資本は、この事を自覚しているが故に、新内閣は大学問題を全ての施政のはじめであるとして最重要課題として打ち組んできた。わけても全共大学闘争の一方の天王山であり、弱い環である東大闘争に対して、官憲、政府、マスコミはこの間集中砲火をあびせ続けてきた。東大を圧殺し、相場を作って全国の大学闘争の個別撃破と七〇年安保粉砕、これがわれらの路線である。従って、われわれは、七〇年大闘争の真みをかけて、全国学友・先進的労働者と一体となって東大闘争を死守せねばならない。

東大闘争の本質と社会的位置が以上のようなものであるとすれば東大闘争は、全国大学のバリケード・ストと一体化して帝国主義権力と闘い、さらには全労働者階級との安保闘争への大合流なくしては、その展望はない事は一見して明らかだろう。

学生解放区神田カルチエを拠点とし、東大闘争の旧総司令部・時計台解放講堂を実力で奪還せよ！

一・一八、一九本郷・神田闘争の革命的前進を、全国学園バリケード・ストへと拡大せよ！

騒乱罪適用粉砕／政府・官憲のあらゆる弾圧を排除せよ！

国家権力との燃烈な戦闘を七〇年安保大闘争へと深化せよ！

全国工場占拠、自主管理で、七〇年安保闘争を勝利せよ！

全ての侵略、抑圧、悲惨、暴虐粉砕／社会主義世界革命万歳！

解放講堂からのアピール

「われわれは十八日未明より八千人にのぼる機動隊による、一万発以上の催涙弾射撃、陸、空からのガス水放射、そして八十人のピストル部隊まくり由した全面的闘争圧殺攻撃にたいし、解放講堂に依ってこれをむかえ打った。そして丸一日間、彼らを一歩たりとも解放講堂に近寄らせないという形で、機動隊を使った、大学当局、国家権力の狂気の沙汰と言うべき闘争圧殺攻撃を完全に粉砕しつくした。われわれはこの巨大な成果の上に立って、さらに永遠に権力の機動隊導入による凶暴な東大闘争、全国学園闘争、そして日本帝国主義の全面的圧殺策動を完膚なきまでに粉砕し、解放講堂を核に断固として闘い抜いている東大闘争全学共闘会議（山本義隆議長）は、十八日夜、旺盛な士気をもって同日機動隊を粉砕しつくした解放講堂内部隊の英雄的なアピールを公表するとともに全国のすべての闘う労働者、学生諸君にたいし、熱烈な連帯と闘争貫徹のメッセージを発表した。

アピール

全国の学生、労働者の諸君
断固たる実力闘争に起て！

われわれの解放講堂に対する（そしてそれはとりも直さず、全国学園闘争に対する）一切の権力の悪らつな攻撃を粉砕しつづける覚悟である。われわれの士気はきわめて旺盛である。というのはわれわれはけしかから、機動隊の圧倒的物量作戦に見事に表現されている生産力物神化に基盤をおく体制そのものに対して過去一年間にわたって全存在をかけて闘いをいどみつづけてきたのだから。

われわれは、この解放講堂全面攻撃に集約されている現代日本帝国主義の普遍的、根底的矛盾に対して非妥協的に闘い抜く決意を新たにすると同時に、東大につづいて全都、全国の闘う学生、労働者諸君がわれわれと深く連帯して全ブルジョア権力総体に対する断固たる実力闘争に決起されんことを訴える。

全共闘メッセージ

東大当局は、われわれの闘いの要求であるところの七項目はじめ八・一〇告示の問題など、われわれの問いに全く答えようとしないばかりでなく、無内容な"提案"をちらつかせ、自己保身に小心翼々たる日共・民青をひきつけることにより、七学部集会などの茶番劇による収拾策動に終始してきた。そして今や、自からダンとしてきた機動隊に露骨的に依拠し、全共闘運動の暴力的圧殺をテコに大学自体の新たな再編の暴挙を推し進めようとしている。

しかし全共闘は、この例を見ない過酷な弾圧のなかで、東大構内においては解放講堂にむけられた彼らの攻撃を英雄的に粉砕して東大正門前において、また、神田地区一帯において、日大、中大、明治大などのすべての闘う学友のみならず、多数の闘う労働者とかたく連帯して路上バリケード闘争など圧倒的な実力闘争を闘い抜き権力のあくなき攻撃、弾圧を粉砕しつくした。

このわれわれの闘いは、帝国主義権力、ブルジョアジーに対する全人民の闘いの普遍的な方向性を先取りし、そしてその明確な展望を切り拓いたものであった。全都、全国のすべての闘う労働者、学生諸君は、われわれ全共闘とともに、総力をあげて権力、ブルジョアジーを打倒する闘いに決起してほしい。そして日本帝国主義の再編の画期である七十年へむけて、あらゆるところで強固な実力闘争を展開して行こうではないか。一切の妥協を排し、敗北を恐れず、全力をあげて原則的な闘いを組織することが、われわれの勝利の唯一の条件である。

一月十八日
東大全学共闘会議

急をつげる世界

ニクソン新政権にバトンタッチされたアメリカ帝国主義は①インフレ②景気持続③ドル防衛④黒人⑤ベトナムと、四面楚歌の中で、何一つ有効な方針を打出せぬままズルズルと反動化と戦争政策を強化しつつ、矛盾を拡大し続けている。

タイ、インド、メキシコなど第三世界の人民は昨年以来反逆の銃をとりはじめた。

アジア・太平洋の軍事的抑圧のカナメ石として酷使されてきた沖縄では、二・四ゼネストを突破口に、永年の怒りが実力闘争に転化しようとしている。

日本帝国主義に未曾有の危機

日本帝国主義にも、いま驚くべき規模で、その存亡の危機が、急速に広がっている。強引な独占の高度成長に次ぐ高度成長の中で、根深い矛盾を体内に拡大しつつ、年を追ってウツ積してきた不満は爆発寸前にまで達している。あらゆる刺激が、直ちに体制問題にまで発展する状況を迎えている。これこそが七〇年大闘争に向かって煮つまって行く日本階級闘争の現局面でなくて何であろう。

ゲバ棒、投石、占拠、バリケード、これらは、抑圧社会に対する反逆の象徴であり、代弁である。

東大闘争における七項目要求の

都市ゲリラ闘争大飛躍

19日の本郷・神田地区

東大解放講堂に対する機動隊の攻撃を完膚なきまでに粉砕し、一方では、これに呼応して日大、中大、明大など全都の学友の連帯による神田地区都市ゲリラ闘争に勝利して、個別学園闘争を名実ともに全面的反権力闘争へと転換せしめた二十日の偉大な闘いにつづき、十九日は、全都の学生、労働者数万を結集した神田、本郷地区の都市ゲリラの闘いに大規模な飛躍をとげた。また、十八日午前十時すぎより三千二時間あまりにわたって機動隊撃滅闘争を貫徹した解放講堂部隊百人の英雄的な闘いは、再々度東大内入構禁止令を二十二日午前九時まで延長する窮地に権力を追いつめ、その無展望、無方針ぶりを暴露した。

この日午前十時すぎ、東京・神田、お茶の水の中大学生会館中庭に、十八日の闘いに鼓舞され、決起した五千人にのぼる全都、全国の学生、労働者が、権力に対するむき出しの闘志もあらわに結集した。そして、山本義隆・東大全共闘議長、秋田明大・日大全共闘議長らが「東大構内に巣食い、凶暴な弾圧をくり返している官憲を粉砕しつくすのが唯一の任務」と方針提起を行なった後、東大全共闘を先頭に、東大解放の闘いに決起した。そして、本郷三丁目交差点まで機動隊のあゆる弾圧をはねのけてデモンストレーションした後、神田地区に取って返し、本郷二丁目—聖橋—小川町—駿河台下の全地域に撒き石などで強固なバリケードを構築し、完全に解放した。一般市民らもこれを聞きつけて続々と戦列に加わり、数万の大部隊をもって機動隊とバリケードをはさんで全面対決した。

今や東大闘争が、そして日大闘争が先取りし強固な闘いをもって提起しつづけてきた帝国主義的再編に反逆する闘いは、その普遍性を、十九日本郷、神田地区大都市ゲリラ闘争により、大衆的に受け止められその正当性を立証した。

醜悪な権力の走狗〝加藤将軍〟

無用な抵抗はやめなさい。すぐに出てきなさい—解放講堂の闘いの能力なしのスタンプ印をおされて現在の彼らの地位そのものが、そして彼らが私的に所有しつづけてきたいわゆる〝学問〟が、彼らの手から取り上げられそうになった途端、あわてふためいて権力のお先棒かつぎを買って出たのが、解放講堂に〝無条件降伏〟を迫る〝将軍〟加藤なのだ。

「真理の探求者であるわれわれは暴力には無力」などとオツにすまして事態を傍観しつづけてきた部分は最早論外である。十九日付のブル新で「一部学生たちは命がけでやっているのです。先生方もご自分の大学なんですから、自分の手でおやりになるべきだ」と「皮肉たっぷりに」抗議、向坂工学部長を怒髪天をつかせた（東京、九面）とヤユされ、そのうえ、機動隊に聞いてもらった自分の研究室に飛び込んで資料がどうの、永年の研究がどうのと泣き事しか言えない無神経なアタ抜けぶりを満天下に知らしめただけでも、東大闘争は〝社会〟に大いなる貢献をしたと言わなければなるまい。

しかしそんな彼らでも、今だに旧態依然たる東大の絶対権力を有する支配者として君臨しているのだ。そして解放講堂の〝大掃除〟につづいて、日常的大学機能の最大の行事としての入学試験を強行して、わが身の保身をはかることをのみ思いわずらっているのだ。

権力の道はき清める

日共—民青

この闘争を一貫して、大学当局国家権力と一体化し、われわれに対して敵対的存在でありつづけてきた日共・民青は、〝機動隊導入〟最後通告が出て以後も、かれらの本質をまざまざと見せつける数多くの行動に終始した。

ここにその一つ二つを示すとまず、かれらは、この間、常時、千人余にも及ぶ外人部隊を駐留させ闘争破壊に奔走しつづけてきた。かれらの本拠である教育学部にも退去命令が出されるや、あたふたと、立ち去っていった。〝トロツキスト導入の口実を作った〟という例によって無内容な声明を出しておくためのアリバイづくりとしての、教育学部からの撤退は、全くわずかの間に行なわれたものの、中にあったブロックや牛乳ビンのもち出しはもちろんのこと、ホーキの跡もはっきりするほど赤門前・教育学部前広場を掃除していくという、念の入れようであった。これこそかれらの東大闘争に対するハレンチな墓穴を、何よりも物語っているといえよう。

次に、日共・民青の私有財産物たる、東大生協、東大新聞のこの間の動きをみてみると、かれらはこのカタワな権力者たちの矮小な欲望につけ込んで、権力はさらに露骨に大学への介入、われわれの闘争に対する弾圧を強行しようとしているのだ。

われわれ東大全学共闘会議は、決してそんなことは、許さない。全国の学生、労働者と連帯して、権力との全面対決の強固な戦線をうちかためて行くなかで必ずや入試の強行を実力をもって粉砕し、東大に死の宣告を与えるであろう。

神田解放区講堂と呼応して闘う

解放講堂にたてこもる、先進的学生の英雄的闘いに呼応して、十八日、お茶の水、神田地区は、これと連帯して闘う、学生、労働者都民ら三千人で埋まった。

まず、解放講堂への暴力的圧殺が開始された直後の九時半、日大中大等の闘う学友らは、お茶の水駿河台前派出所を占拠し、機動隊に対して一大抗議表明を示した。続いて日大、中大で総決起集会を開いた。東大全共闘、日大全共闘、中大全共闘ら三千人の学友は、午後二時、再び、東大にむけ、支援の行動を開始、圧倒的優位で、機動隊を押しまくった。この間神田、お茶の水地区は、文字通り解放地区であり、各所に堅固なバリケードが築かれた。この日は、約千人の学友が十九日にそなえて、その内部にこもりこんだ。

70年対策を至上目的

超大型新予算案

大蔵省は、「財政硬直化是正」「警戒型中立予算」を唱えながら新予算編成にとりくんでいたが、このほどその原案が内示された。

しかしながら、結果からみればその初期の方針は無惨にも打ち破られ、一般会計で兆七千三百九十数億（一五・八％の伸び）財投計画約三兆（一・八％）の超大型予算となった。それにはある重大な理由がそうさせた事を見なければならない。

言うまでもなく、日本独占体にとって資本の優全成長以上の関心事とは、その存在理由そのものの問い返される危機—七〇年安保大陥級激突以外には無かろう。

六九年度予算は、すべてがこれに結びつき、その特色は七〇年対策一色にぬりつぶされていると言っても過言ではないのだ。この事を新予算案にそって具体的に見てみよう。

(一)まず公共料金値上げは、本年度は国鉄をのぞいてきえみにすえおかれた。

電々公社をはじめ、全ての新年度事業工事計画は延期される事になった。ただし米価に関しては、生産者・消費者共にすまされることになった。

(二)財政硬直化打開のために、制度抜本改悪をねらった、食管制度、地方交付税制度、健保制度はいずれも見送られ、自らこの財政負担をかぶる事になった。（この三制度だけで約三兆円を使う）

(三)欧米で福祉国家論が時代おくれとなりつつあるのに、日本独占は思い出した様に社会保障関係の支出を大巾に増している。（社会福祉費二五％）

一般公共事業費を人気取りのために一・八％ふやす。財投と合せて五五万二千戸の住宅が、団地サイズの解消など、質的改善は見送って戸数のみをめざして作られる事になった。

(四)さらに露骨には、警察庁に、その約四五％が七〇年対策用として三百七十五億円が内示された。これにより八万二千四百七十人分の装備が用意され、中央直轄の官区機動隊四千二百人が新設される事になった。

(五)防衛費は、二五％増という防衛庁の当初の手想を裏切って一五％増となったが、六千人増員やファントムはけずしであり、復活折衝で融通されるであろう。

その中で基地対策費・軍点がおかれ、三五％増の百二十億円となった。

(六)また沖縄の民生安定費は、九〇％アップの三八億円となった。

(七)七〇年対策とは一応関係で、特徴的な部分は、経済協力費の九〇％増の四百十五億円、海外経済協力基金への政府出資三五％増の二百十四億円の内訳では科学技術振興費の二一％増の八百八十八億円がある。国立大学には定員増を認めず、粉骨砕の大学はアップを認めないとしているのも注目に価する。

その後の各省との復活折衝で、この七〇年対策的特色は特に防衛治安関係でますます明らかにされつつ、ほぼ原案に近い形で政府案としてまとめられた。

この様に本年度予算は、従来の計画経済的な編成態度が大きくくずされ、極めて政治的な編成であるこの事は七〇年をめぐる日本帝国主義の危機の根深さを、逆にあらためて裏書きするものであると言える。

東西間緊張は再び激化

混迷深めるニクソン政権

「米国史上、景気上昇の期間は平均二九ケ月だが、現在の景気上昇は九四ケ月を継続している。人間は八十歳で老人と、われ、犬なら十三歳で老年である。米国景気循環の上昇期の長さにこの方式をあてはめてみると、現在の上昇期は正真正銘のメトセラ（ノア時代前のユダヤ族長で、九六九年生きのびたという伝説的長寿者）だとみなければなるまい」（サムエルソン・昨年一二月）

八年続きという史上異例の米国経済の好況の先行きに、ただならぬ雲ゆきを見取らぬエコノミストはいない。

ニューフロンティアを合言葉に生産設備の大巾な技術革新により US商品の国際競争力をつけ、それによって経済成長とドル防衛を両立させようとした民主党ニューエコノミックスはまたたく成功しただろうか？

設備投資は五八年三億ドルから年々飛躍的に増加し、六六年には六百億ドルを突破し、そればかりでなくGNPも、五八年約四千五百億ドルから十年間で倍近くまで成長した。

しかし、この設備近代化は米国国際競争力を強めたであろうか。驚くなかれ、この過程で米国は鉄鋼の三・五億ドルの輸入国から九億ドルの輸入国に変った。完成車の輸出は一貫して伸びず、輸入は六一～六七年で四倍に増加した。

この事は、日・独をはじめとする他の帝国主義が、米国よりもさらに高いテンポで成長し、競争力を持つ様になった事を意味する。

米独占体の競争力は相対的に低下したのであった。ケネディ・ブレイントラストの夢見た米帝一元支配の復活は机上の空論にすぎなかったのである。

一方で、米国個別資本は、低賃金と高い生産性と安定した政情に吸引され、とうとうとヨーロッパに流れ続けた。六七年まで、続いてヨーロッパを主対象とする直接投資、及び短期資本移動は古い。ヨーロッパ社会を破壊し、経営方式・産業組織をダイナミックに再編しヨーロッパを米産業の強力なライバルにしつつ他方ドル危機と金戦争を益々深刻化したのであった。

ベトナム戦争による海外支出は後進国直接投資収益により相殺出来る範囲をはるかに越えて、ドル危機をさらに助長しつつあるが、米帝は決してベトナムから手を引けない。ベトナム革命の勝利は金を持つ様になった事を意味する。

ベトナム革命の第三世界人民を激励し、同時にドミノを惹起し、それは、いかなる帝国主義も鎮圧できぬばかりでなく、国内プロレタリアートの蜂起による全ての帝国主義の死滅にまでつながざるを得ないからである。

国内では進んだ宣伝・販売方式に追いまわされるアメリカ労働者の不満と要求は、独占的労組がパイプ配し続ける、大産別労組のパイプをはなれ、単組におけるローカル・イッシューを弄出させている。またピラミッド社会の官僚化・固定化は、出世に絶望したホワイトカラー層（教員、公務員、医療労働者等）を闘争のように労組活動に向けている。

こうして、ベトナム反戦運動、ブラックパワー、ヒッピー、犯罪激増として周辺部に出発したアメリカ帝国主義の危機は、徐々に労働者本隊の流動化を引きおこしはじめている。好況の破綻はこの過程を一段と促進するであろう。

米独占体は、このような後進国以来最大の首離期を迎えて、ドル問題も、ベトナムにも、黒人問題にも何一つ有効な方針を出し得ないまま、ズルズルと矛盾の爆発を準備して行かざるを得ない。

挙党体制も得られぬまま小粒そろいのニクソン内閣は、「偉大な社会」などと言う福祉国家の看板さえも投げすてて「法と秩序」の現状維持を暴力によって行なう他に能はないと言える。

風雲急な東南アジア

ベトナムを主軸とするアジアの情勢は、風雲急をつげている。

新植民地主義によって、政治的独立は得たものの、完全国産業に圧迫され、収奪され、後進国では、人民の強烈な反抗性の上に、急速な経済成長が計られ、インフレは進行し、農業は破壊され、人民の生活は危機にひんしている。

インドネシアでは新らたな武装ゲリラ隊が活動を再開し、全面的蜂起の機をうかがい、南朝鮮でもゲリラ戦の準備が進んでいる。パキスタンでも学生と労働者がアユブ・カーン打倒に立ちあがり、インドでは北部を中心に学生が決起し六つの大学が閉鎖されている。ビルマでは政府軍の支配する所は点と線のみになっているという。

ところでアメリカ商務省海外投資局は、昨年四月投資規制のリストを発表し直接投資の対象を、過剰資本経済に入ったEEC・ヨーロッパからA・A・LAに切り変えるよう指導し始めた。それ故、米帝の後進国軍事支配は、世界的に一段と強化されるであろう。

先に見た東南アジアの政情から見れば、総じてさえないニクソン政権の人事のなかにあって、従来から「限定核戦争」の有名な主唱者であり、抜きんでて光るヘンリー・キッシンジャーが、安全保障担当の大統領特別補佐官に任命された事は注目に値する。

東南アジアに、賠償・経済援助・アジア開銀・ASPAC・貿易を通じて日本帝国主義は米国以上の権益をこの地方に打ち立てた。従って日帝、そがベトナム戦争に第一の利害を有している。

軍事的抑圧をアメリカのみにまかせておくことは、もはや許されないであろう。自衛隊によるインドネシア石油の護送、三次防とその四次防に向けての修正、日米安保同盟強化延長、日本帝国主義の参戦国化のプランである。

・東西冷戦は再び激化させられるであろう。スターリン主義に反発する国民的感情を利用し、それを反共イデオロギーとして集約し、あらゆる労働者・人民の権利主張を「共産主義」の「間接侵略」とレッテルをはって弾圧するのがかれらの論理である。

一方でスターリニストは、警察主義の「侵略」の危険性を口実に内部人民を抑圧している。それ故スターリニストも体制内変革に意を得るのだ。従って東西冷戦は、両陣営の支配者双方の利益のために、双方の合意の上に、内部矛盾の弾圧のためにかもし出されて来るであろう。

こうしてニクソン政権は何一つ課題を解決し得ず、戦争と危険の火種を世界中にまきちらして行くであろう。

しかしながら、南ベトナム人民を先頭に、チェコ労働者・学生、フランス学生・青年労働者、ブラックパワー、西独SDS、日本学生・反戦青年、世界を動かし始めた新しい潮流は、もはや真ぴつのような抑圧の神話〉を語さないだろう。